中国歴史書外国伝に見える獣祖神話について

小　山　　瞳

はじめに

中国には神話がないと言われることがある[1]。実際に、先秦時代の神話文献のなかには、他地域でみられる、祖先が動物であるといったような「獣祖神話」が少ない[2]。このことについて、三品彰英『神話と文化史』は次のように述べる。

> 大陸中央部の漢族の間にはこの種の祖先神話が行なわれていないことは、特に注意しなければならない問題である。漢族がこの種の獣祖神話を最初から持っていなかったものか、あるいはかつては持っていたとしても、周代以来農耕生活をつづけて来た彼らは、中華的な自尊精神の発達につれて、いつの間にかそのような古い伝承を清算してしまったものか、いずれにするも彼らは獣祖神話には縁遠い民族である[3]。

たしかに、残存する漢族の伝承のなかに獣祖神話を見つけることは難しい。特に、動物と人間が婚姻をするタイプについては皆無にひとしい[4]。だが、動物と人間が婚姻をするモチーフ（以下、「獣婚モチーフ」）は異類婚姻譚にも含まれる。異類婚姻譚であれば、漢族の伝承にも数多く存在する[5]。

ここで、異類婚姻譚と獣祖神話の関係について考えてみたい。このことを考えるにあたって、昔話と神話について言及したウラジーミル・プロップの指摘が参考になるだろう。

> わたしたちにとっては神話は発展段階的にみて昔話より早く形成されたジャンルである。……このことからみて、神話は発展段階的にみて昔話より早く形成されたジャンルであると断言できる。
> 昔話には娯楽としての意味があり、神話には神聖な意味がある[6]。

プロップはこのあと、神話を「未開民族の物語」と称し、それらには宗教的、呪術的な意

味があるとした。そして、「未開民族の物語」が「儀礼のなかに組み入れられたり、儀礼を伴ったりする[7]」と、のべている。

また、日本の神話研究では、三輪山伝承と昔話「蛇婿入り」苧環型との関連性など、異類婚姻譚の源流に「神婚」神話がある、といわれてきた（ここでいう「神婚」とは、神婚の結果、のちの子孫繁栄につながるという神婚である）[8]。実際に日本の「神婚」神話を見てみると、神が蛇やワニ、白鳥といった動物の形を取ってあらわれ、人間との間に子が生まれる、というかたちをとる。このように、まず神話に、神婚譚、すなわち異類婚姻譚が確認される。これが原型となって、種々の異類婚姻譚が生成したと考えるべきであろう。

中国の獣祖神話について考える場合、このような日本の神話・伝承研究から援用を受けることは有効だと考えられる。本論文では、これを出発点として中国歴史書外国伝の獣祖神話と『太平広記』所収の異類婚姻譚について比較・対象を行う[9]。この作業を通じて、両者のあいだに何らかの継承関係があるのか、解明する端緒としたい。

１、「変身」について

獣祖神話は中国歴史書外国伝に散見し、その一例が烏孫の伝説（『史記』巻一二三・大宛列伝や『漢書』巻六一・張騫伝）にみえる（傍線等文章記号は引用者、以下同じ）。

> 臣居匈奴中、聞烏孫王號昆莫、昆莫之父、匈奴西邊小國也。匈奴攻殺其父、而昆莫生、弃於野。烏嗛肉蜚其上、狼往乳之。單于怪以爲神、而收長之。及壯、使將兵、數有功、單于復以其父之民予昆莫、令長守於西（城）〔域〕。昆莫收養其民、攻旁小邑、控弦數萬、習攻戰。單于死、昆莫乃率其衆遠徙、中立、不肯朝會匈奴。匈奴遣奇兵擊、不勝、以爲神而遠之、因羈屬之、不大攻。[10]
>
> 張騫は武帝の質問に答え、その内容は次のようであった。烏孫王・昆莫の父は匈奴の西にある小国の王であった。匈奴はその父を殺し、昆莫は生きたまま野原に棄てられた。ところが、烏が肉をくわえてその上を飛び、狼が来て乳を飲ませた。単于は不思議に思い、昆莫を神だと考え、養育した。昆莫は成長すると、いくつかの戦功を立てた。単于は、昆莫に首長として西域を守らせた。昆莫はその人民を手中にすると、近辺のまちを攻撃した。単于が死ぬと、昆莫は配下のものをつれて遠くに移動し、入朝をしなくなった。匈奴は兵を派遣して攻撃したものの、昆莫を倒すことができず、神だと考え、彼を敬遠するようになった（大意）

捨てられた子どもが烏や狼によって養育され、その子どもが烏孫の始祖となる。ここでは子どもが動物に育てられたことが強調され、動物が人間に変身をすることはない。

興味深いことに、この種の獣祖神話は『太平広記』などの中国中古の小説・説話集に見つけることが難しい。さらにここで指摘すべきは、獣祖神話は単一のかたちを取るのではない、ということである。上記の烏孫神話は「哺乳型」とよぶことができる。これ以外に「婚姻型」もある[11]。獣祖神話の「婚姻型」であるから、当然、それは「獣婚」のモチーフを有している。以下、「獣婚」モチーフを有する獣祖神話および異類婚姻譚について、次のように分類したい[12]。

A 型：人間の女性と動物のオスが婚姻する
B 型：人間の男性と動物のメスが婚姻する

この分類に従って、まずは獣祖神話を見てゆきたい。

獣祖神話 A 型：『魏書』巻一〇三・高車伝（ほか『北史』巻九十八・高車伝）

高車、……俗云匈奴單于生二女、姿容甚美、國人皆以爲神。單于曰「吾有此女、安可配人、將以與天。」乃於國北無人之地、築高臺、置二女其上、曰「請天自迎之。」經三年、其母欲迎之、單于曰「不可、未徹之間耳。」復一年、乃有一老狼晝夜守臺嗥呼、因穿臺下爲空穴、經時不去。其小女曰「吾父處我於此、欲以與天、而今狼來、或是神物、天使之然。」將下就之。其姉大驚曰「此是畜生、無乃辱父母也。」妹不從、下爲狼妻而產子、後遂滋繁成國、故其人好引聲長歌、又似狼嗥。

高車については俗に次のように言う。匈奴の単于に二人の美しい娘が生まれ、その国の人々は彼女らをこの世ならぬものと考えた。単于は、娘を天に与えると言って、北方の無人の地に高台を築き、二人の娘をその上に置いた。三年がたち、娘たちの母は二人を降ろしたいと思ったが、単于は聞き入れなかった。また一年がたつと、一頭の年老いた狼が現れ、昼も夜もその台を守って吠え、さらに台の下を掘って穴をつくり、その場を離れようとしなかった。妹娘は、その狼こそが自分の嫁ぐべき相手だと思い、台から降りて狼のもとへ行こうとした。姉娘がそのことをとがめたものの、妹娘は従わず、台から降りて狼の妻となって子を産んだ。その後、国ができた。高車の人々の歌声が狼の吠

声に似ているのはこのためである。[13]（大意）

獣祖神話 B 型：『周書』巻五十・突厥伝（ほか『北史』巻九十九・突厥伝等）

突厥者、蓋匈奴之別種、姓阿史那氏。別爲部落。後爲鄰國所破、盡滅其族。有一兒、年且十歳、兵人見其小、不忍殺之、乃刖其足、棄草澤中。有牝狼以肉飼之、及長、與狼合、遂有孕焉。彼王聞此兒尚在、重遣殺之。使者見狼在側、並欲殺狼。狼遂逃于高昌國之北山。山有洞穴、穴內有平壤茂草、周回數百里、四面俱山。狼匿其中、遂生十男。十男長大、外託妻孕、其後各有一姓、阿史那即一也。子孫蕃育、漸至數百家。經數世、相與出穴、臣於茹茹。居金山之陽、爲茹茹鐵工。金山形似兜鍪、其俗謂兜鍪爲「突厥」、遂因以爲號焉。

突厥は匈奴の別種で、かつて隣国によって滅ぼされた。一族のなかに、十歳ほどの男児がいたが、兵士は男児を殺すに忍びず、足を切って、草の茂った湿原に棄てた。すると、メスの狼が、肉を男児に食べさせた。男児は成長すると狼と交わり、狼は懐胎した。隣国の王は、男児を殺させようとした。派遣された者は、狼も殺そうとした。狼は高昌国の北の山に逃れた。山には洞穴があり、穴のなかは草が茂り、四方は山に囲まれていた。狼はそこに隠れて、十人の子を生んだ。十人の子は成長すると、穴から出て、それぞれ一姓をなした。子孫は繁栄し、数代の後、みないっしょに穴のなかから出て、柔然の鉄工として仕えた。かれらの間ではかぶとのことを「突厥」と言ったので、それが呼び名となった。（大意）

A 型、B 型ともに、動物が人間に変身することはなく、人間と交わり、子が生まれる。では、『太平広記』の異類婚姻譚ではどうだろうか。ここで比較のために、狼と人間の異類婚姻譚を二話あげる。

異類婚姻譚 A 型：『太平広記』巻四四二「張某妻」（出『稽神録』）

晉州神山縣民張某妻、忽夢一人衣黄褐衣、腰腹甚細、逼而淫之、兩接而去。已而妊娠。遂好食生肉、常恨不飽。恆秪唇咬齒而怒、性益狠戾。居半歳、生二狼子。既生即走、其父急擊殺之。妻遂病恍惚、歳餘乃復。郷人謂之狼母。[14]

晋州神山県の張某の妻は、突然、夢を見た。黄色の褐衣を着て、腰と腹が異様なまでに細く、そして彼女に迫ってこれを犯し、二回交わって去っていく、というものだった。

妻はしばらくすると妊娠した。そして、生肉を食べ、くちびるを噛み、歯ぎしりをするなど、異常な行動が増えた。半年後、狼の子を二匹産んだ。子らは生まれるとすぐに走るようになり、夫は子を撃って殺した。妻は病気になってぼんやりとしていたが、一年ののち、元にもどった。村の人は彼女を狼母といった。（大意）

異類婚姻譚 B 型：『太平広記』巻四四二「冀州刺史子」（出『広異記』）

唐冀州刺史子、傳者忘其姓名。初其父令之京。求改任。子往未出境。見貴人家賓從衆盛。中有一女容色美麗、子悅而問之。其家甚愕、老婢怒云「汝是何人、輒此狂妄。我幽州盧長史家娘子。夫主近亡、還京。君非州縣之吏、何詰問頓劇。」子乃稱父見任冀州、欲求姻好。初甚驚駭、稍稍相許。後數日野合、中路却還。刺史夫妻深念其子、不復詰問、然新婦對答有理、殊不疑之。其來人馬且衆。舉家莫不忻悅。經三十餘日。一夕、新婦馬相蹋、連使婢等往視、遂自拒戶。及曉、刺史家人至子房所、不見奴婢、至櫪中、又不見馬、心頗疑之、遂白刺史。刺史夫妻遂至房前、呼子不應、令人壞窗門開之、有大白狼衝人走去、其子遇食略盡矣。

冀州刺史の子は、とある貴人の家で美しい女と知り合う。子はその女が気に入ったので、彼女に求婚し、結婚の約束を取り付けた。子の両親は突然のことだったので心配したが、花嫁は受け答えがはっきりとしていて、家も裕福だったので、二人の結婚を許した。ところが、一ヶ月ほどして、花嫁が不審な行動をとるので、子の両親が怪しんで、新婚夫妻の寝室に行き、窓をこじ開けると、大きな白い狼がどこかへ去り、子はことごとく食われていた。（大意）

「張某妻」では、夢のなかではあるが、狼のオスが人間に変身している。また、「冀州刺史子」では、新婦は人間の女性として出現するものの、最後に新婦が白い狼であったことが明らかとなる。

このように、『太平広記』の異類婚姻譚では変身のモチーフを伴うことが多く、特に異類婚姻譚 B 型ではほぼすべての例で、動物のメスは変身する[15]。なお、異類婚姻譚 A 型では、上掲の「張某妻」のように、動物のオスが変身するパターンもあるが、後述の「杜修己」（『太平広記』巻四三七）のように変身をしないパターンもある。

対して、獣祖神話では、動物の性別を問わず、動物は動物の姿のまま、人間と結婚する。それは、その種族の由来が動物にあることを強調するためであり、トーテミズムとも関連す

るだろう[16]。そこには動物を祖先とすることを忌む通念を見ることはできない。

２、「情愛」について

『太平広記』異類婚姻譚では人間と動物の情愛について描写されることがある。情愛の有無を判断するには、異類の正体が露見した際に人間がどのように異類を取りあつかうかというのが一つの指標となるだろう。

まずは異類婚姻譚 B 型における異類と人間の情愛について見てみよう。人間の男性と犬のメスの異類婚姻譚をあげる。

異類婚姻譚 B 型：『太平広記』巻四三八「沈覇」（出『異苑』）

吳興沈霸、太元中、夢女子來就寢。同伴密察、唯見牝狗、每待霸眠、輒來依牀。疑爲魅、因殺而食之。霸復夢青衣人責之曰「我本以女與君共事。若不合懷、自可見語、何忽乃加耻歟。可以骨見還。」明日、收骨葬岡上。從是乃平復。

呉興の沈覇は、太元年間に娘と共寝する夢を見た。同行の者は、メス犬が覇の寝床に入るのを見た。覇は犬を化け物だと思い、犬を殺して食べた。覇はまた夢を見た。青い服を着た人が、覇が娘を殺したことを責め、娘の骨を返すように言う、というものであった。翌日、覇は骨をあつめて岡の上に埋めた。その後はなにも起きなかった。（大意）

犬のメスは、夢のなかで人間の女性になって出現する。ところが、女性が犬であることが判明すると、犬は殺される。最後に犬の父親と思われる者が沈覇の夢に出現し、娘の骨を返還するように言われ、沈覇は岡の上に犬の骨を埋める。犬は殺されるのであるが、その一方で、沈覇は犬を供養するなど、殺してしまった犬への、あわれみが感じられる。

一方、獣祖神話 B 型の突厥の獣祖神話（第 1 節参照）では、人間の男性と狼のメスが交わり、子が生まれたことが書かれていた。そこでは人間の男性と狼のメスの婚姻の次第について詳細にのべない。人間と動物が種を越えて婚姻したことよりも、狼がわが子を守ったことに字数が費やされる。

では、A 型の、歴史書の獣祖神話および『太平広記』の異類婚姻譚ではどうだろうか。白犬のオスに関する二話をあげる。まず、いわゆる盤瓠神話を掲げる。

獣祖神話 A 型：『後漢書』巻八十六・南蛮西南夷列伝（ほか『搜神記』巻十四等）

①昔高辛氏有犬戎之寇。②帝患其侵暴、而征伐不剋。乃訪募天下「有能得犬戎之將吳將軍頭者、購黃金千鎰、邑萬家、又妻以少女。」③時帝有畜狗、其毛五采、名曰槃瓠。下令之後、槃瓠遂銜人頭造闕下、羣臣怪而診之、乃吳將軍首也。④帝大喜、而計槃瓠不可妻之以女、又無封爵之道、議欲有報而未知所宜。⑤女聞之、以為帝皇下令、不可違信、因請行。帝不得已、乃以女配槃瓠。⑥槃瓠得女、負而走入南山、止石室中。所處險絶、人跡不至。於是女解去衣裳、為僕鑒之結、著獨力之衣。帝悲思之、遣使尋求、輒遇風雨震晦、使者不得進。經三年、生子一十二人、六男六女。槃瓠死後、因自相夫妻。織績木皮、染以草實、好五色衣服、製裁皆有尾形。……今長沙武陵蠻是也。

犬のオスと人間の娘による婚姻について言及している箇所を下線で示した。下線部分について、プロットごとに分けると次のように整理できるだろう。

①昔、高辛氏の国に犬戎から侵略があった。
②王は犬戎の将を討ち取った者に褒美として娘を与えると、通知を出した。
③犬の槃瓠が犬戎の将の首を持ってやってきた。
④王は喜んだものの、槃瓠に娘を与えることはできないと思い、群臣に相談した。
⑤娘は父王に約束を違うべきではないと言って、父も渋々認め、娘は槃瓠に嫁ぐ。
⑥娘は、盤瓠とともに人里離れた深山へ行き、そこで衣服を脱いで蛮人のように結髪する[17]。

娘は自ら望んで盤瓠に嫁ぐのではあるが、盤瓠と娘に情愛の念があったのかどうかについては詳しく触れられていない。これは、『太平広記』異類婚姻譚A型と比較すると一目瞭然である。盤瓠神話と同じ、人間の女性と犬のオスの婚姻譚を次にあげる。

異類婚姻譚A型：『太平広記』巻四三八「杜修己」（出『瀟湘録』）

①杜修己者、越人也、著醫術。其妻即趙州富人薛贇之女也、性淫逸。修己家養一白犬、甚愛之、每與珍饌。②食後、修己出、其犬突入室內、欲嚙修己妻薛氏、仍似有奸私之心。薛因怪而問之曰。爾欲私我耶。若然、則勿嚙我。犬即搖尾登其牀。薛氏懼而私焉。其犬略不異於人。③爾後每修己出、必奸淫無度。④忽一日、方在室內同寢、修己自外入、見之。即欲殺犬。犬走出。修己怒、出其妻薛氏歸薛贇。⑤後半年、其犬忽突入薛贇家、口

銜薛氏髻而背負走出。家人趁奔之、不及、不知所之。犬負薛氏直入恆山内潜之。毎至夜、即下山、竊所食之物、晝即守薛氏。經一年、薛氏有孕、生一男、雖形貌如人、而遍身有白毛。薛氏只於山中撫養之。……

下線部分について、プロットごとに整理すると次のようになる。

①杜修己には、淫逸な妻・薛氏と、かわいがっていた白犬がいた。
②白犬が薛氏の部屋に来て、床を共にする願望を伝え、それを察した薛氏も白犬と寝る。
③その後も、杜修己がいないのを見はからって、薛氏と白犬は荒淫の限りを尽くす。
④ある日、杜修己は薛氏と白犬が寝ているのを目撃し、白犬を殺そうとするが、白犬は逃げ隠れ、薛氏は実家に帰される。
⑤半年後、白犬は実家にいた薛氏を連れ、山に駆け落ちする。

『太平広記』「杜修己」と先にあげた盤瓠神話を比較すると、「杜修己」のほうが、白犬のオスと人間の女性が婚姻に至るまでの次第がより詳細に書かれている。「杜修己」では、このあと、白犬と人間の間に子が生まれ、その子についても詳細に書かれ、獣婚のモチーフだけが強調されているわけではない。だが、盤瓠神話とくらべると、「杜修己」のほうが獣婚に至るまでの次第について字数を費やしているといえるだろう。

このように、獣祖神話では、動物と人間の婚姻の様相について詳細には書かない。そのことよりも、動物と人間の間に生まれた子に関する記述が多い。一方、『太平広記』異類婚姻譚では、子に関する記述よりも、獣婚に至るまでの次第や、動物と人間の情愛がどうであったのかについて詳細に記述する。

３、「子ども」について

『太平広記』所収の異類婚姻譚を見る限り、人間と動物の間に子どもが生まれないケースのほうが圧倒的に多い[18]。

一方、歴史書所収の獣祖神話では、A 型・B 型を問わず、必ず子が生まれた。上掲の高車の始祖神話（A 型）では、人間の女性と狼のオスが交わって子が生まれた。狼の血を引く子孫は、狼が遠吠えをするように歌うなど、父親である狼の形質を引き継いでいた。

また、上掲の突厥の始祖神話（B 型）では、人間の男性と狼のメスが婚姻し、子が生まれ

た。子の形質に関する詳細な情報はないものの、子が動物であることをうかがわせる記載はないので、おそらくは人間だと考えられる。そうだとすれば、獣祖神話において、子は父親の、人間としての形質を引き継いだことになる。そして、獣祖神話「哺乳型」においても、子が捨てられ、異類に育てられたことが重要な要素となっている。

このように、獣祖神話では、子が生まれ、その子が動物に育てられた（「哺乳型」）、もしくは動物の血を引くこと（「婚姻型」）が重視される。では、これら「哺乳型」「婚姻型」の関係性については、どのように考えればいいのだろうか。「哺乳型」「婚姻型」の関係について、三品書は次のようにのべる。

> ひろく神子出誕の神話においては、人間的成婚を予想せず、母と子だけが存する場合が多く、母の存在が父よりも基本的であることはすでに卵生神話の考察においても論じたところである。……獣婚神話の型においても、母なる動物のほかに夫（父）の存在を語らない「B 型の二」をもって基本型の一と考えてよく、「B 型の一」はそれの特殊相あるいは発展相であると見てよい[19]。

ここでいう「卵生神話」とは、「宇宙卵すなわち卵から天地が開闢するという観念にもとづく神話[20]」のことであり、「B 型の二」は獣祖神話「哺乳型」を、「B 型の一」は獣祖神話「婚姻型」（人間の男性と動物のメス）にあたる。同書は、卵生神話などの「人間的成婚」によらないものが先にあり、その特殊な形あるいは発展型として獣婚神話があることをいう。そして、B 型の二――「哺乳型」が先にあり、その後、B 型の一――「婚姻型」が発展した、との見解を示す。これを踏まえると以下のように想定できよう。

獣祖神話と異類婚姻譚の関係性については、「哺乳型」が先にあり、そののち「婚姻型」が亜種として生成された、そして、「婚姻型」の「神婚」神話もしくは獣祖神話がのちに『太平広記』に見られるような、異類婚姻譚の源流となった、と。

ところで、本論文では、これまで、『太平広記』から異類婚姻譚を引き、中国歴史書外国伝から獣祖神話を引いてきた。つまり、小説説話中の獣婚モチーフを有する説話を異類婚姻譚とし、歴史書中の獣婚モチーフを有する説話を獣祖神話と見なしてきた。だが、『太平広記』などの小説筆記にも、三品氏のいう「人間的成婚」によらない獣婚神話が存在する。それが『太平広記』巻四七九「蚕女」（出『原化拾遺伝』）である。本話はいわゆる馬娘婚姻譚であり、『搜神記』（二十巻本）巻十四にも、細部で違いはあるものの、同内容の説話が載

る。ここでは原文および訳文は割愛し、プロットのみをあげる。

①高辛帝の時、ある国の王が隣国の捕虜となる。
②娘は「父を国に連れもどした者と結婚する」と誓いを立てる。
③馬が父を連れて帰り、馬は娘を見ると異常に興奮する。
④父は、馬が娘を求めて興奮していることを知ると、怒って馬を殺し、さらに馬の皮を剥いで庭にさらす。
⑤娘が馬皮の側を通りかかると、馬皮がめくれて娘を包み、どこかへ飛ぶ。
⑥娘と馬は蚕になる。それが養蚕の由来となり、馬頭娘信仰が生まれる。

本話はいわゆる馬娘婚姻譚であり、日本のオシラ神信仰とも関わりがあるとされる[21]。本話には獣婚のモチーフがみられるものの、娘と馬の間には子が生まれない。その代わり、娘は馬の皮に包まれ、蚕が生まれる。このように、馬娘婚姻譚は「人間的成婚」によらないという点で神話的だといえるだろう。

この馬娘婚姻譚を、先にあげた盤瓠神話と比較してみたい。両話とも、戦功を立てた動物が王の娘を求めるという点では同じである。しかし馬娘婚姻譚は「人間的成婚」の要素がない、という点で盤瓠神話とは異なる。馬娘婚姻譚は、中国の神話資料ではなく、『搜神記』あるいは『太平広記』といった小説・説話集に見られる。その内容から見て、その発生はかなり古く、神話と言うべきものではないか、と推測される。

本論文で最初に掲げた烏孫の獣祖神話（「哺乳型」）もまた、「人間的成婚」によらないものであった。これと、「婚姻型」B、すなわち人間の男性と動物のメスが婚姻する「婚姻型」を並べてみると、前者すなわち「哺乳型」のほうが神話的原型をより濃厚に留めていると言えるだろう。

おわりに

獣祖神話と異類婚姻譚はともに獣婚のモチーフを含みながらも、変身モチーフの有無、人間と異類の情愛の有無、子の有無の三者に違いがみられることをのべた。まとめると、次の

ようになる。

	中心となる話題	変身	情愛	子
獣祖神話	異類と人間の婚姻＜動物の血をひく子	無	少	有
異類婚姻譚	異類と人間の婚姻≧動物の血をひく子	有	多	有・無

獣祖神話では、異類と人間が婚姻に至るまでの過程よりも、生まれた子が動物の血をひくことが中心的話題となる。一方、『太平広記』の異類婚姻譚では、動物の血をひく子のことに字数が費やされる場合もあるものの、多くの場合、異類と人間が婚姻に至るまでの途中経過が中心的話題となる。そのことは、獣祖神話では必ず子が生まれるのに対して、異類婚姻譚では子の有無が問題にならないことからもうかがえる。

変身については、異類婚姻譚では、動物のオスは必ず変身するとは限らないが、メスは必ず変身する。異類婚姻譚では、動物が動物であることが秘匿され、結末にいたって、その正体が明かされる。一方、獣祖神話では祖先が動物であることが重要な意味をもつため、動物が人間に変身することはない。

白川静『中国の神話』に「神話が伝統として生きるのには、実修的儀礼を伴うのでなければならない。すなわちその信仰が生きているのでなければならない[22]」とあるように、神話は儀礼や信仰を伴う。烏孫・高車・突厥の神話も、実修的儀礼を伴うものであったとされる[23]。護雅夫「古代一テュルク部族（高車）の始祖神話について――イオマンテの研究によせて――」がいうように、こうした獣祖神話は「単に「説話」として観念的に受け取られていたのではなく[24]」、一族の神聖なる「事実」として信じられていたと考えられる。これと同じことは馬娘婚姻譚にもいえるだろう。

それに対して、『太平広記』に記される異類婚姻譚は必ずしも儀礼や信仰と結びつくとは限らない。もちろん広く考えれば、日本の「蛇婿入り」と三輪山伝承のように、異類婚姻譚のなかにも「神婚」神話に源流をさかのぼることのできるものも存在する。だが、『太平広記』所収の異類婚姻譚のなかには「張某妻」（第１節参照）のように、人間が狼と交わったことを奇談として語る説話が見られ、これらは神聖なる「事実」として語られるものではない。

このように、『太平広記』の異類婚姻譚には娯楽的要素が入り混じっていると確認できる。そのことは、異類婚姻譚において、子の誕生よりも、獣婚のほうを中心的話題として取りあげていることからもうかがえる。

『太平広記』に獣祖神話や始祖神話タイプの話を見つけることは難しい。しかし、異類婚

姻譚は数多く収録される。異類婚姻譚はもとをたどれば、「神婚」神話との指摘もあるので[25]、『太平広記』異類婚姻譚の存在は、中国歴史書 外国 伝以外にも、獣祖神話や「神婚」神話がかつては広範に存在した可能性を示唆していよう。三品『神話と文化史』がいうような「獣祖神話には程遠い民族」ではなかったのである。

1)このような中国神話に対する見解は、森三樹三郎『中国古代神話』（大安、1969 年再版）序章、および魯迅『中国小説史略』第二篇「神話と伝説」（中島長文訳・東洋文庫版、平凡社、1997 年）などにみえる。

2) たとえば、アメリカ先住民・モドック族の神話では、灰色熊と天上の大酋長の娘との間に生まれた子が祖先だとする。山下欣一「アメリカ・インディアンの神話伝説」（『世界の神話伝説総解説』（増補新版）（自由国民社、1983 年）所収）。

3) 三品彰英『神話と文化史』（平凡社、1971 年）455-456 頁。

4) ただし、動物と人間が婚姻せず、動物が母として子を養うタイプについては、『春秋左氏伝』宣公四年所収の楚の子文の伝説を反証の一例としてあげることができよう。

5) たとえば、浙江省・江蘇省に虎女房譚がある。馬場英子・瀬田充子・千野明日香編訳『中国昔話集』1（平凡社、2007 年）317 頁参照。

6) ウラジーミル・プロップ著・斎藤君子訳『ロシア昔話』（せりか書房、1986 年）41 頁上段。

7) 注 6 所載書、41 頁下段。

8) 神婚と異類婚姻譚の関連については、『日本民俗大辞典 上』（吉川弘文館、1999 年）「神婚説話」の項（三浦佑之執筆）を参照。

9) 『太平広記』には、日本の説話・昔話に見られるような異類婚姻譚が多数収録される。なお、『太平広記』の異類婚姻譚については小山瞳「『太平広記』所収異類婚姻譚について」（『説話・伝承学』第 30 号、2022 年）を参照。

10) 『史記』（中華書局、1959 年）。以下、歴史書については中華書局本に拠る。また、『史記』日本語訳については、小川環樹訳注『史記列伝』（岩波書店、1975 年）82-83 頁を参考にした。

11) 「哺乳型」および「婚姻型」の名称については那木吉拉「中亜狼和烏鴉信仰習俗及神話伝説比較研究――以阿爾泰語系烏孫和蒙古等諸族事例為中心」（『中央民族大学学報』第 167 号、2006 年）を参照。

12) 注 3 所載書は獣祖神話について次のように分類する。A 型：人間の女性と動物のオスによる婚姻、B 型の一：人間の男性と動物のメスによる婚姻（以上「婚姻型」）、B 型の二：動物が母として子を養う（「哺乳型」）。これを参考にした。

13) 日本語訳については、『騎馬民族史 1――正史北狄伝』（平凡社、1971 年）265-266 頁（護雅夫訳注）を参考にした。また、後述の突厥の神話については、同書 2・265-266 頁（山田信夫訳注）を参考にした。

14) 『太平広記』については汪紹楹校注『太平広記』（中華書局、1981 年）に拠る。

15) 注 9 論文によると、『太平広記』所収の異類婚姻譚のうち、異類女房譚 52 例中すべてで異類が変身する。異類婿譚でも 28 例中 17 例で異類が変身する。

16) 獣祖神話とトーテミズムの関係については、注 11 所載論文ほか、那木吉拉「阿爾泰語系諸民族図騰神話形態追尋」（『百色学院学報』第 26 巻、2013 年）などにおいて論じられている。

17) 本文中の「僕鑒」と「独力」については、Chungshee Hsien Liu,The Dog-Ancestor Story of the Aboriginal Tribes of Southern China（The Journal of the Royal Anthropological Institute of Great Britain and Ireland,1932）366 頁に従う。同論文は、これらの語がタイ語・ビルマ語由来の語であることをいう。

18) 注 9 所載論文によると、『太平広記』所収の異類婚姻譚のうち、全 80 例中 20 例で子（人間および異類）が生まれる。

19) 注 3 書 485 頁。

20) 注 3 所載書 310 頁。

21) 今野円輔『馬娘婚姻譚』（岩崎書店、1956 年）145-187 頁。

22) 中央公論社、1980 年、279-280 頁。

23) 護雅夫「古代一テュルク部族（高車）の始祖神話について――イオマンテの研究によせて――」（『古代トルコ民族史研究 2』（山川出版社、1992 年）所収）。

24) 注 23 所載書 293 頁。

25) 注 9 所載三浦佑之氏の説。

〔追記〕本論文は、アジア民間説話学会日本支部 2022 年度大会（於オンライン・2022 年 2 月 21 日開催）での口頭発表が土台となっています。ご助言いただいた先生方に、この場を借りてお礼申し上げます。